尼崎発

長尾和宏の

町医者で行こう!!

第106回

第4回全国在宅医療医歯薬連合会にようこそ

三師会はお互いを知る機会が少ない

今年5月23～24日に神戸国際会議場において第4回全国在宅医療医歯薬連合会全国大会が開催される。不肖、私が総大会長を拝命しているので今回、その概要を紹介し多くの先生方の参加をお願い申し上げる次第である。

多くの自治体に三師会という会がある。医師会、歯科医師会、薬剤師会と師がつく3つの職能団体の役員が情報交換を行う場が何らかの形で設けられている。三者とも大学が6年制という共通点もある。そして何よりも地域包括ケア時代においては、この3つの職種の在宅現場における連携が年々重要になってきている。しかしその割にはお互いの実情を知らない。知る機会が意外に少ない。そこで本大会が設立されたわけであるが、第4回のメインテーマは「在宅医療の光と影」となった。というのも在宅医療の認知度はいまだ高いとはいい難い。懐疑的な見方もある。であれば美談だけでなく影にも光を当てた上で10年後の在宅医療の姿を模索してみようと考えた。

2030年の在宅医療

第一会場の冒頭は「2030年の在宅医療」というシンポジウムを設定した。病院再編が大きな議論になっているが、病院から地域へのシフトに対する反対意見は根強い。また在宅医療の質の担保も待ったなしである。そんななか在宅医療はどこに進もうとしているのか再確認したい。10年後の在宅医療の近未来像を語りあうという企画である。シンポジストは丸川珠代氏（参議員議員、元参議院厚生労働委員長）、迫井正深氏（厚生労働省大臣官房審議官、医師）、太田秀樹氏（全国在宅療養支援診療所連絡会事務局長、在宅医）を、座長は新田國夫氏（日本在宅ケアアライアンス議長、在宅医）と島田潔氏（在宅医療政治連盟会長、在宅医）が務める。折しも4月の診療報酬改定の直後である。これから在宅医療をやるかどうか迷っている開業医や勤務医にとっては今後の医療政策の方向性を知るまたとない機会になるはずだ。

続いて歯科領域では、例えば摂食嚥下に関して「咽頭残渣のある人に食べさせるか？」というセッションがある。また薬剤師が中心となり「在宅ポリファーマシーへの対応」など切実な課題にも切り込む。減薬には三者の連携が不可欠である。もちろん今や国策となった「人生会議」に関するセッションも木澤義之氏（神戸大学）に加っていただき白熱した議論が展開されるだろう。看護師やケアマネが主導する人生会議の講座もあり三師以外の多職種の参加も大歓迎である。死生観に関するマニアックなセッションもある。今のところ1500人程度の参加者を想定している。

光だけでなく影にも

この20年、在宅医療関係の学会や研究会が増えた。今後、集約化される方向になるのだろうが、会が多すぎてややマンネリ化している印象がある。そこで今回は、決して美談ではなくリアルな在宅医療を「本音で語りあう」ことに主眼を置いた。関西風のお好み焼きやたこ焼きを想像して欲しい。大会ホームページをご覧いただくと気がつくであろうが、かなり濃いコテコテ味のプログラムになった。

例えば2日目に「在宅医の働き方改革」という企画がある。病院勤務医の過重労働も大問題であるが、24時間365日対応を強いられる一馬力の在宅医療は国の大方針と完全に真逆を向いている。事業主なら過労死しても犬死だ、という考えのままだと今後、新たに在宅医療に取り組む開業医は増えないだろう。今こそ在宅医療ならではの働き方改革を議論する必要があるのではないか。

また本コラムでも再三書いているが、在宅看取りにまつわる諸問題、特に霊安室往診や医師法20条の誤解の蔓延など、美談だけではなく現場の医師が困っている問題にも光を当てたい。だから在宅医だけではなく病院や救急医療の関係者にも是非とも参加して頂きたい。

歯科や薬科との連携

実は私は第1回の東京大会、第2回の京都大会、そして第3回の東京大会に参加してきた。それらを通じて強く感じたことは、この大会は通常の医学会とかなり異なる雰囲気である。皆、同じ方向を向いているかと思いきや、正直言って時に真逆だったりする。1年以上前から今大会の準備をしているが、実行委員会のたびに医師は歯科医師や薬剤師のことをあまり知らないことを痛感させられる。

在宅医療に従事する歯科医と薬剤師は団体としての結束力が相当に強い。一方、医師は彼らと比較して団結力が弱いどころか、どこかバラバラ感がある。ラグビー人気でワンチームという言葉が流行語になったが、今こそ医師もワンチームになるべきだ。勤務医も開業医も所詮は一蓮托生であるので、お互いをよく知ることが大切だ。つまり医師会活動としての在宅医療という方向性になる。1日目の記念式典には医師会や行政からも役員や幹部の皆様にお越しいただき、多方面から地域包括ケアを語っていただく。

在宅医療においてもICTの活用が謳われている。医療情報の共有がますます重要になる。長崎県の「あじさいネット」が最も有名だが、多職種が情報共有する仕組みは長崎県や佐賀県にとどまらず福岡県にまで及んできた。そしてICTだけではなく顔の見える連携も重要だ。今回、在宅医療に関わる全国の歯科医や薬剤師とも直接懇親できることを楽しみにしている。

ちなみにこの大会は第4回から厚生局単位が主催者になり開催されることになった。今回は近畿厚生局の管轄が主催者となる。私は近畿厚生局の管轄は二府四県だと思っていたが、福井県も管轄範囲であることをつい最近知った。慌てて福井県の各団体にも後援依頼をしている。

『洗骨』鑑賞後、奥田瑛二氏と語る

2日目の午後の市民公開講座は「映画を観ていのちを語る会」とした。映画『洗骨』を上映し、主演の奥田瑛二氏と語る会である。映画の舞台は沖縄。生きる意味を考えさせられる評価の高い作品である。その主演俳優が上映後に壇上に上がり、関根友実アナが聞き手になるという豪華な市民公開講座である。映画とトークで市民とともにグリーフケアを学ぶ機会になればと考えている。もちろん学会参加者は誰でも参加できるが、事前申し込みが必要で定員に達すれば自動的に締め切られる。下記の大会QRコードから早めに申し込んでいただければ幸いだ。4月1日からは市民枠の申し込みを開始するので、くれぐれもお早めのお申し込みをお願いしたい。

実は今回、一番来ていただきたいと願うのは「在宅医療を始めるか迷っている先生方」や「少しやっているが、自信がない」という先生方である。日本中どこでも同じだが、在宅医が年々高齢化するなか、今後の在宅医療は病院が担う時代であると考えている。在宅医療に取り組みたいと考えている先生が参加しやすい、できるだけ敷居の低い会にしたい。いや、関西ならではの「お祭り」である。すでに事前申し込みが始まっている。是非、お待ちしています。

第4回全国在宅医療
医歯薬連合会QRコード

ながお かずひろ：1984年東京医大卒。95年、尼崎市に複数医師による年中無休の外来・在宅ミックス型診療所「長尾クリニック」を開業。近著に『小説「安楽死特区」』（ブックマン社）など

週刊 日本医事新報
Japan Medical Journal
https://www.jmedj.co.jp
2020/02/15
No.4999
2月3週号
1921年（大正10年）2月5日
第三種郵便物認可（毎週土曜日発行）

18 特集

Dr. 野中の内視鏡べからず集
野中康一

01 キーフレーズで読み解く　外来診断学

腫瘍摘出後にCK上昇と顔面腫脹を呈した42歳男性
生坂政臣 ほか

07 すきドリ～すき間ドリル！ 心電図

胸部痛を訴えるも正常洞調律……その意外な結末とは？
杉山裕章

10 プライマリ・ケアの理論と実践

慢性閉塞性肺疾患（COPD）スクリーニング
向原 圭

12 難渋症例から学ぶ診療のエッセンス

腹部症状が先行し確定診断に難渋したIgA血管炎
河野友彰 ほか

14 クリニックアップグレード計画

Web問診連動型の予約受付システムで診療プロセスを効率化

38 Choosing Wisely で日常診療を見直す

慢性蕁麻疹の患者に診断目的の検査をルーチンですべきでない
谷口 恭

03 プラタナス

41 私の治療

52 プロからプロへ

56 長尾和宏の町医者で行こう!!

68 NEWS DIGEST

69 感染症発生動向調査

70 学会・研究会・セミナー情報

72 ドクター求NAVI

76 ドクター掲示板

58 医療界を読み解く【識者の眼】

和田耕治	新型コロナウイルス対策
小田倉弘典	高齢者『意思決定』は困難
猪俣武範	AIによる医療の責任は誰が？
古屋 聡	『自分ごと』を増やそう
川﨑 翔	問題スタッフの安易な解雇は危険
堀 有伸	映画にみる日本社会の無意識